～HISTORY～ 暮らしを変えた立役者

ヤオコー会長 川野 幸夫氏 ⑦

母のトモは最終的に八百幸商店入りを許してくれた

「男が一度言ったことを翻すとは何事か。おまえのいるところはない、出て行きなさい」。家業に加わりたい、八百幸商店に入りたいと意を決して話した私に、母は手厳しい言葉を浴びせました。

ただ、後で聞くと、当時でも周りの人には「うちの息子が跡を継いでくれない」とこぼしていたそうです。うれしい半面、それでも母なりに悔しさはあったのだと思います。弁護士になるという約束をたがえてしまったわけですから、ふがいない息子だと思っていたのでしょう。しばらくは口をきいてくれませんでした。私も覚悟を決めて、黙って店を手伝い始めました。私がいると母は店には出てこない。食事の時もそうでした。私が食事をしていると母はいなくなってしまう。そんな日々がしばらく続きました。

2カ月くらいたってから母はすぐに私を八百幸に戻すことにしました。

マルエツでは多くの人にお世話になりましたが、いろいろと教えていただいたのが、2号店の店長だった田中篤さんです。山形県の中学を卒業後に上京してマルエツに入った方で、朝早くから夜遅くまで一生懸命働いている姿が印象に残っています。後に田中さんは取締役にまでになりました。面倒見のいい人で、今でも感謝しています。

もう一つ思い出すのは、けんか騒動です。鮮魚売り場にいた私は、魚をさばく職人さんと一緒に仕事をしていました。はっきり覚えてはいませんが、私が職人さんのプライドを傷つけることを口走ってしまったのでしょう。今にもとっくみあいの状況にまでなりましたが、周りの全員が止めてくれたので、事なきをえました。手かぎを持っている相手に立ち向かおうとしたのですから、むちゃな話です。短気な性分が災いしました。

スーパーの未来 熱く議論

マルエツ鮮魚部門で働く

そらく母がマルエツの祖業である鮮魚を学んでくるよう、高橋社長にお願いしたのだろうと思います。

マルエツでお世話になったことで一番大きいのは、高橋社長やご兄弟と知り合えたことです。一つ屋根の下に住んでいましたが、おいできるのは、夜しかありませんでした。たまにお会いできると生意気にもこれからのスーパーのあり方について議論を交わしていました。

3年くらいお世話になる約束だったはずですが、結局お世話になったのは1年余りでした。これには事情があるようです。どうも母は高橋社長から私をマルエツにもらえないか、とお願いされたようです。高橋社長からすれば、「八百幸みたいな小さな商店に私をいさせてはもったいない」というのがあったと聞いています。「マルエツさんにご迷惑をかけたくない」と、

でしょうか、母が「しょうがないから許してあげる」と言ってくれました。重ねて、「明日からここに行っておいで」と渡されたのがマルエツの高橋八太郎社長の連絡先でした。次の日からマルエツで働くことになりました。高橋社長の自宅に厄介になり、店の仕事をしました。当時マルエツは週1日の休みでしたので、休みの日は八百幸に戻って働きました。

マルエツは浦和市（現さいたま市）の鮮魚店「魚悦商店」からスーパーになり、埼玉県内で4店舗を経営していました。当時、埼玉のスーパーとして一番元気な企業でした。私が働き始めたのは、大宮市（現さいたま市）にある2号店で、私は大変繁盛していた2号店の鮮魚部門に配属され、仕事を覚えていきました。お

日経MJ 2019年5月1日掲載

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。